

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370267

研究課題名(和文)メアリ・ウルストンクラフトに見られるピクチャレスク

研究課題名(英文)"Picturesque" in the Writings of Mary Wollstonecraft

研究代表者

石幡 直樹 (Ishihata, Naoki)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：30125497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft, 1759-97)の評論、紀行文、書評、書簡などに多く見られる「ピクチャレスク」(picturesque)という言葉は当時広く用いられ、ピクチャレスク(絵になる)な風景を求めることは社会現象になっていた。本研究は、ウルストンクラフトがこの用語を用いた文脈を集め、そこに込められた含意を探り出すことによって、自然美の発見と受容の時代において彼女が果たした役割を解明し、それが彼女の進歩史観や女性解放の理念にどのような影響を与えたのかを探った。

研究成果の概要(英文)："Picturesque" frequently seen in Mary Wollstonecraft's critiques, travel journals, reviews, and letters is the buzzword in her days which symbolizes the vogue to seek after the ideal landscape for painting. Following the context which features this term, we have scrutinized its each implication in order to elucidate the role Wollstonecraft played in the age of the discovery and reception of natural beauty, consequently to explicate how it affected the development of her view of history as progress and of emancipation of women.

研究分野：英文学

キーワード：ピクチャレスク ウルストンクラフト 女性解放 進歩史観 ロマン主義時代

1. 研究開始当初の背景

自然の持つ、力強く荘厳で神秘的な局面と莫大さと広大さの感覚、すなわち「崇高」美の発見は、かつて何世紀にもわたって慣習的で退屈な受け止め方で描かれ、嫌悪と反発をもって語られてきた山岳に対する人々の趣味の変化をもたらした。18世紀後半、崇高とは畏怖を与えるような強烈で荘厳で突然なもの、美とは喜びを与えるような繊細で優美で滑らかなものというエドモンド・バーク (Edmund Burke) の理論が浸透していた。画家であり紀行文作家のギルピン (W. Gilpin) は、この理論に実際の風景の具体的な味わい方をつけ加えた。眼前の景観の一部の要素を画家のように画面に切り取り、その中で再構成するのである。このピクチャレスク、すなわち画趣に富んだあるいは絵になる美という考え方が、看過されていた英国の風景美の再発見を促す。絵になる風景を求めて旅し、多くの挿絵入り紀行文を著したギルピンによれば、「ピクチャレスクの美の法則」とは、「自然景観の描写を人工の風景 (artificial landscape) の原則によって脚色することである。限られたキャンパスで広大な自然を表現するために、別の場所にある「風景の小さな部分 (parts)」や「風景に箔をつける城郭や廃墟」などを再構成して取り込むことである。

このような時代にメアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97) は、1795年6月末から10月初めまでスウェーデン、ノルウェー、デンマークの三国を巡り、『スウェーデン、ノルウェー、デンマーク短期滞在中にしたためた手紙』 (*Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*. 1796) を上梓した。そこに見られる彼女の自省の軌跡は、紀行文の大きな特徴である自然描写にも刻み込まれている。北欧の荘厳で荒涼とした大自然の様相を、彼女は「ピクチャレスク」という用語を頻繁に使用して描写している。だが、やや感傷的過ぎる筆致で彼女が描いているのは大自然だけではなく、それを見つめる自分自身の心の風景でもある。第1の手紙では、初めてスウェーデンの地を踏んだ名も知らない入り江の美しい自然に触れて、その景観を叙述するだけではなく、それによって自身の失意がいかに癒され慰められたのかを情緒豊かに記している。また、夜も日の光が残る白夜の美しさ之感極まって、眠りにについている森羅万象とさまざまな思いに耽る自分とを比べて、常よりもいっそう強く生を実感している。

申請者は1990年頃からウルストンクラフトを研究対象としており、1993年の日本英文学会での口頭発表「Mary Wollstonecraftの女性教育観」では、『女性の権利の擁護』 (*A Vindication of the Rights of Woman*. 1792) の女権思想を、初期の徳育本 (conduct book) と比較し、強硬な女権論の裏面には皮肉にも封建的な女性観が隠れていたと指摘した。

1993-94年度には科研費を得て、『擁護』以降の彼女の思想の変化を自我意識との関連から考察した。その成果を発展させて論文“Mary Wollstonecraft’s Introspective Journey in Scandinavia” (*Enlightened Groves: Essays in Honour of Professor Zenzo Suzuki*. 1996) にまとめ、後期の『手紙』では内面の吐露が見られ、女権拡張論が初期の評論より複雑になり、その自我意識の展開には近代的自我の萌芽が見られると論じた。また、1997年のイギリス・ロマン派学会シンポジウムでの発表を「メアリ・ウルストンクラフトの分別と多感」(『英文学研究』第77巻第1号、2000年) にまとめ次のように論じた。女性の弱点でもあり美德でもあるとされた感性は、彼女らを規定し縛りつける鎖でもあったが、逆に理性によって彫琢された感性は、男性の築いた道徳律の牢獄から逃れる手段ともなった。

また、2002-03年度は科研費を得て、英国ロマン主義文学の自然愛に見られる環境意識の源流を探り、論文「女としての自然」(『つくられた自然(岩波講座 文学7)』岩波書店、2003年)で、他者としての自然/女性の表象を考察し、「女/自然」の権利回復の動きを文学作品のテキストに探り、並行して『手紙』の翻訳を進めた。さらに、2011-13年度にも科研費を得て、ウルストンクラフトの「女性の進歩 (improvement)」と「国家の進歩」に関する概念を比較し、相互の影響関係を探った。本研究はこれら一連のウルストンクラフト研究を基盤として、それらを融合発展させるものとして準備・企画されたものである。

2. 研究の目的

ウルストンクラフトの評論、紀行文、書評、書簡などに多く見られる「ピクチャレスク」 (picturesque) という言葉は当時広く用いられ、ピクチャレスク (絵になる) な風景を求めることは社会現象ともなっていた。本研究の目的は、ウルストンクラフトがこの用語を用いた文脈を集め、そこに込められた含意を探り出すことによって、自然美の発見と受容の時代において彼女が果たした役割を解明し、それが彼女の進歩史観や女性解放の理念にどのような影響を与えたのかを探ることにある。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者による関連著作や資料の分析と解釈を主な方法とする。直接の研究対象は、『手紙』と評論、批評、書評や私信などである。著作と資料の分析以外にも、国内・国外に資料収集を目的とした出張を行った。

4. 研究成果

研究成果は以下の5. にあがる2本の論文である。そのうちの「ウルストンクラフトと

ピクチャレスク」の要旨は以下のとおりである。

メアリ・ウルストンクラフトの『手紙』は、1796年に革新派のジョンソン書店から刊行された。北欧の社会と自然を見聞して抱いた旅の印象を、彼女は自分の人生と重ね合わせて随想風に綴っている。そこに一貫して見られるのは人類、社会、そして女性は進歩しなければならないという彼女の信念である。

ウルストンクラフトの内省は、紀行文の大きな特徴である自然描写にも刻まれている。道中目にした北欧の荘厳で荒涼とした大自然の様相を、彼女は絵になるようなあるいは画趣に富むという意味の「ピクチャレスク」という当時の流行語を頻繁に用いて描写している。彼女のいうピクチャレスクとは第一に見るものに感興を催させ、さらにその中に変化あるいは対照の要素が認められる風景とよびたい。

ピクチャレスクということばは、英語では18世紀初頭から使用例が見られるが、世に広まり一種の流行となったのは18世紀後半のことである。画家であり紀行文作家のギルピンは、『1770年夏のワイ川および南ウエールズ各地の絵画美を主とした探勝記』(Observations on the River Wye, and several Parts of South Wales, &c. relative chiefly to picturesque beauty; made in the Summer of the Year. 1770)を始めとする多くの旅行記によって、ピクチャレスクの隆盛に大きな役割を果たした。

広大無辺の自然を一枚の画布という有限の芸術様式に写しとめることは本来不可能であるが、自然の本来の姿には備わっていない構成の妙をつくすための法則を打ち立てることで、それ補うことができるとギルピンはいう。ピクチャレスクの美の原則と名付けられたその構成の法則とは、画家の視野すなわち画布の範囲に収まるような風景のいくつかの小さな部分を取り込む画法である。

ピクチャレスクの実際の技法とは自然風景を描く際に何らかの人工物を画面に導入して、自然と人為の対比という構成によって自然の大きさを表現し風景画として完結させることである。これは広大無辺の自然を有限の画布内に写し取るという風景画に内在する矛盾を認識し、それを解消するための手段といえよう。したがってピクチャレスクとは、表向きは眼前の風景美を最大限に享受するための美学であり、理屈では偶然と自然の産物ではあるが、その実際はときには滑稽なほど作画的な企てといえる (Byerly 55)。

ギルピンの『ワイ川探勝』は1782年に出版され1789年に再版されているが、ウルストンクラフトはその書評を文芸誌「アナリティカル・レビュー」(Analytical Review)の第5巻(1789年9月)に寄せている。その中で彼女がギルピンの絵画美の原理を探るというテーマに相応の敬意を表しつつも、読者は

その原理にやや稚拙なものを感じるかもしれないと評しているのは興味深い。彼女はギルピンの絵画美の原理に一定の評価を示す一方で、その原理には繊細で微妙な側面がありいささか幼稚なところもあると、遠回しの皮肉ともとれるいい方をしている。

有限の時間と空間の中でしか創作行為をなし得ない人間にとって、どのような形式の芸術であれ無限を写実的に描写することは不可能である。その不可能を可能にするあるいは超克するための技巧としては、ギルピンの考案はたしかにやや安易であるような印象を与え、原理とまでいえるのかどうか疑問が残る。

ギルピンは、実在の風景の構成物の配置を再構成するばかりか、ときには槌をふるって破壊してそれらの形状を変えてしまいたいとさえ願う。その作為を、思慮分別のある賢いやり方で行う正当な行為と捉えている。脚色の域を超えて実景に注文をつけ、風景の改造すら望むのである。彼がそれほどまでに考えるのも、ひとえに自然と人工の妙なる組み合わせが生み出す「絵になる」な風景を描きたいがためである。その組み合わせの実現のためならば、多少の作為はあつてしかるべきだというのが彼の信条である。ここに見られるように、人は風景にすら自分の都合のよいように手を加えたいと思い始めた。絵になる風景を求め続けたギルピンに顕著に見られるように、風景は人の趣味に合わせて改竄され始めたといえる。

ピクチャレスクの原理をきゃしゃで幼稚と評したウルストンクラフトは、そこに見られる風景の改変や改竄という要素をおそらく認識していたと思われる。では、その彼女が『手紙』でこの言葉を愛用していることをどう捉えればよいのだろうか。

『手紙』の設定上の宛先とされた人物イムレイはアメリカの軍人で、のちに土地投機や調査に携わり地誌や小説も書いた。革命後のフランスに渡って政治や商業に関わっていた1793年春、パリでウルストンクラフトと出会い翌年二人の間に娘ファニーが生まれた。1795年イムレイを追ってロンドンに戻った彼女は、彼が貿易事業と他の女性のために彼女を見捨てたことを知って自殺未遂を起こす。そのわずか二週間後、彼女はイムレイの要請を受けて彼の代理人として北欧三国を巡った。機略縦横のイムレイにとっては彼女に気分転換を促すと同時に自分の貨物船の消息を探る絶妙の手段であり、ウルストンクラフトには転地療養の意味合い、フランス革命に対して中立姿勢を取った北欧諸国への関心、イムレイとの復縁のかすかな望み、またそれとはうらはらにイムレイへの感情依存からの脱却を求める気持ちがあったのだろう。加えて彼女には旅行記出版によって経済的自立を求める考えもあったと推測できる (Tomalin 224-5)。

彼女の北欧行きはこのような境遇での失

意の旅であり、やや感傷におぼれた筆致で彼女が描いているのは、大自然だけではなくそれを見つめる自分自身の心の風景でもある。革命後の状況を見聞しようと旅だったフランスで身近に体験した恐怖政治の陰惨な記憶。そして何よりもイムレイとの関係で味わった悲痛な苦悩がこの旅行記の通奏低音となっている。第15信では、フレドリクスター近郊で滝を見て轟音を響かせてほとぼしる流れの勢いに圧倒され、生きることの意味を問い詰めさえする。しかし「目の前で絶えず変化しながらも同じ姿を保つ滝の流れと同じく、思考の流れを止めることはできない」と感じたウルストンクラフトは「来たるべき人生の暗い影を跳び越えようと、手を永遠に向けて差し伸べ」る(175)。

憂慮を抱えて旅立った北欧で、彼女は崇高で酷烈な眼前の自然に加えて自身の苦悩を反映した感情すなわち心象風景をも描写している。彼女が風景以外に人間描写にもピクチャレスクという形容を用いていることは、このことと関係が深いと思われる。この点でウルストンクラフトのピクチャレスクは、風景画の理論あるいは流行の技法という範疇を超えて、人間や風土の美しさを写す基準となっているといえる。

ノルウェーのテンスベルで彼女は、松と樅の木立ちが生み出す詩的な印象によって神秘的な畏敬の念に打たれ、樹木を哲学者になぞらえ木陰に敬意を表している(第9信)。ギルピンの主唱する風景描写の技法としてのピクチャレスクを、視覚を越えて人物や風土の内面を描く隠喩として用いた彼女は、さらに想像の世界を形容することばとして、それを詩的なイメージあるいは印象という意味で使っている。樹木の姿をした哲学者のような存在が、存在の意識と喜びを体現しながら瞑想に耽っているというその世界は、神話や伝説に似たという意味で詩的な、純粋に彼女の想像力によって創造された情景である。ピクチャレスクの含意をこのように拡大させて用いた彼女が、ギルピンの提唱する単なる絵画技法としてのそれに不満を抱いたのも無理はないように思われる。彼女にとってのピクチャレスクとは、人為的な一枚の絵の中にある美だけではなく、想像や空想や思考をいざなってくれるような内的風景にも見られる美であったのだろう。風景や場所の表面的な美しさだけではなく、それらが人の精神にもたらす善良な影響をも彼女は美と捉えていた。

ウルストンクラフトにとってのピクチャレスクな眺めとは内省的なものであり、想像力を喚起し思考を深め空想を楽しむ場面であった。前掲した「アナリティカル・レビュー」誌の書評では、ギルピンの『ワイ川探勝』を、絵画美の原理を主題とするがゆえに価値ある著作と紹介するが、それが原理にまで要約できて他人に伝達可能であればと釘を刺すことを忘れていない。続けて彼女は、確固

とした知識は理性から理性へと伝わるが情緒ははかないものであって伝達はほぼ不可能であると断ずる。単純な情報は直接に伝わるが趣味と感情はより複雑で偶発的であり、作家は常に読者が自分の感情に入り込むように生まれついていると期待することはできないという。そしてギルピンの図解的な絵画はこの不便を補って美の受容の解析を求める想像力を刺激するが、画面の小ささや端正すぎるまとまりや芸術につきものの未完成なところから、崇高というよりは美しいという印象を与えると評している。紀行文の挿絵としての役割を考慮しても、ギルピンの絵画は大胆さに欠け人工的で不自然で、それは画面の広がりやなさに原因があると彼女は捉えている(Jump 37)。

またウルストンクラフトは、自然の色は感情に訴えるが、ピクチャレスク技法の絵画の色は豊かな階調を欠くがゆえにときに目に乱暴に飛び込むと結論づけている。ウルストンクラフトは *puerile* ということばで絵画美の原理には未熟な点があると評していた。ここに見られる「子供っぽい手際のよさ」(*childish neatness*) という評言も同様に、過度の技巧が生み出す安逸というピクチャレスクに潜む陥穽を如実にいいあてている。そのような不備がもたらす弊害として彼女が指摘するのは、想像力の羽ばたく場が奪われてしまうことである。

ウルストンクラフトは、『擁護』において理性(*reason*)を人間と獣を区別する重要な特徴と説明し(15)、女性は理性を身につけて合理精神を持つべきであると主張して、感性への批判を展開した人として知られる。だが彼女は決して理性一辺倒の人であったわけではない。コウルリッジ(*S.T. Coleridge*)は、ウルストンクラフトが自分の意見に対する夫ゴドウィンの反論をいとも軽やかに斥けているようだったというハズリット(*William Hazlitt*)の感想を聞いて「それは想像力豊かな人間が、知性だけの人間に優っている点のほんのひとつの例だ」(*Hazlitt 7, 264-5*)と述べている。ゴドウィン自身は、ウルストンクラフトは誰よりも多く「直観的洞察力」(*intuition*)を身につけていたと述べ、「彼女の宗教や哲学は……感情と審美眼(*feeling and taste*)の純然たる産物であった。……厳密な意味では、推論をほとんどしない(*she reasoned little*)にもかかわらず、彼女の決断がどれほど正確であったかは驚くばかりだった」(*Godwin 125*)と回顧している。

コウルリッジの看破したように、「想像力の人」でもあったウルストンクラフトにとってのピクチャレスクとは、詩的な印象を生み出し思考や空想を妨げずに想像力を喚起する自然風景であると同時に、人間や風土や社会の内面の風景を講える言葉でもあった。

参考文献

Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful.
Ed. J.B. Boulton. London: Routledge, 1958.

Byerly, Alison. "The Uses of Landscape: The Picturesque Aesthetic and the National Park System." *Glottfelty and Fromm* 52-68.

Gilpin, William. *Observations on the River Wye, and several Parts of South Wales, &c. relative chiefly to picturesque beauty; made in the Summer of the Year 1770*. 1782. Ed. Sutherland Lyall. Oxford: Woodstock Books, 1991.

Glottfelty, Cheryl, and Harold Fromm, eds. *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology*. Athens: U of Georgia P, 1996.

Godwin, William. *Memoirs of Mary Wollstonecraft*. Ed. W. Clark Durant. London: Constable, 1927.

Hazlitt, William. *The Collected Works of William Hazlitt*. 12 vols. Ed. A.R. Waller and Arnold Glover. London: J.M. Dent, 1904.

Jump, Harriet Devine. *Mary Wollstonecraft: Writer*. New York: Harvester Wheatsheaf, 1994.

Lyall, Sutherland. Introduction. *Observations on the River Wye, and several Parts of South Wales, &c. relative chiefly to picturesque beauty; made in the Summer of the Year 1770*. 1782. By William Gilpin. Oxford: Woodstock Books, 1991. i-xi.

Tomalin, Claire. *The Life and Death of Mary Wollstonecraft*. 1974. Rev. ed. London: Penguin, 1992.

Todd, Janet. *Mary Wollstonecraft: A Revolutionary Life*. London: Weidenfeld & Nicolson, 2000.

Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman*. 1792. Harmondsworth: Penguin, 1975.

——— and William Godwin. *A Short Residence in Sweden, Norway and Denmark and Memoirs of the Author of The Rights of Woman*. Ed. Richard Holmes. London: Penguin, 1987.

———. *The Works of Mary Wollstonecraft*. Ed. Janet Todd and Marilyn Butler. 7 vols. London: Pickering, 1989.

———. *Letters written in Sweden, Norway, and*

Denmark. Eds. Jon Mee and Tone Brekke. Oxford UP, 2009.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

(1) 石幡直樹 「ウルストンクラフトの見た北欧の女性たち」『国際文化研究科論集』第23号、63-77頁、2015年12月。査読有り。

(2) 石幡直樹 「ウルストンクラフトとピクチャレスク」『国際文化研究科論集』第22号、33-44頁、2014年12月。査読有り。

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東北大学・大学院国際文化研究科・教授
石幡 直樹 (Naoki Ishihata)

研究者番号：30125497

(2) 研究分担者 なし

研究者番号：

(3)連携研究者
なし

研究者番号：
なし

(4)研究協力者
なし